

オスカー・グラーフ ツェツィーリエ・グラーフ・プファフ  
編著 『日本の妖怪』

シュトゥットガルト、1925年（5）翻訳

安 松 みゆき

この幼い天皇の最期について書かれたのが、『平家物語 Heike Monogatari』といわれる小説であり、およそ13世紀に書き留められた。二位尼 Nii-no-ama は、すでに平家の滅亡を予期していた。彼女は、絹の着物を片側に高く持ち上げて、聖なる印章を腕の下に隠し持ち、彼女の腰に宝剣を差した。そして天皇を胸に抱き、次のように語った。「女だからといって敵の手に落ちることはしない。帝のお供をいたします。忠誠を尽くそうと思われの方々は、急いで我々の後に続くがよい。」

そう話した後、二位尼はゆっくりと船の縁に歩みをすすめた。天皇は御年8歳だったが年の割に大人びて見えた。端麗な容貌はあたりも照り輝くほどであった。天皇の黒髪は背中に無造作に垂れている。驚いた顔つきで天皇は「尼前 Amaze、私とどこに行こうとするのか」と訊ねた。二位尼は、このまだ幼い天皇に顔を向け、目から涙を流しながら、次のように答えた。「帝。この世のあなたさまは、前世では10の掟に守られていたので、帝として御生まれになったわけですが、しかし不運に巻き込まれてしまいました。そしてあなたさまの幸せもいま終わります。どうぞ東を御向き下さい。偉大な神を奉る伊勢神宮に別れをお告げ下さい。それが終わりましたら、西に向き直して、仏の名前を唱え、あなたさまを浄土より御迎えに来る仏に心からお任せなさい。現世は悲惨な場なのです。辺鄙でちっぽけで、まるで黍の粒のように小さいのです。しかし波の下には、美しい都があります。至福に充たされた国と言われるものです。そこに私があなたさまを御連れいたしましょう。」この言葉によって二位尼は、安徳天皇をなだめたのである。

そして天皇は、髪を結び、山鳩色の天皇の着物を着て、目には涙を浮かべながら、愛らしい小さな手を合わせた。最初に東を向き、伊勢神宮に別れを告げた。そして西に向き変えて、仏の名を唱えた。ここで二位尼が、天皇を腕に抱きかかえて、「波の下のあるそこには、都があるのです」という言葉で慰めながら、深い海の底に沈んでいったのであった。「ああ、なんと悲惨なことか。春の変わりやすい風が、華々しく神々しい姿を一気に吹き飛ばしてしまった。ああなんと哀れさか！」

別離を暗示する荒々しい波が、大切な人々の存在を打ち砕いた。その宮殿は、永遠に暮らすことのできるために、長生 Chosei (長生き) と呼ばれていた。門の上には「不老 Furo」と書かれている。それこそが、そこを通ると年はとらない門なのである。しかし、10年もたたないうちに、天皇は深い海の雑踏となったのである。

龍は雲の上にいるが、下界に降りてくると魚に変わる。

荒れ狂った海から溺死した平 Taira の怨念が浮かび上がってくる。勇敢な知盛 Tomomori は、高く盛り上がった白波に乗り、かれの怒りの声が、波の音の間を不気味なほど轟いた。

義経 Yoshitsune は、平家が滅亡した数ヶ月後に、壇ノ浦 Danno ura の入り江を船で航行していると、突然恐ろしい嵐に見舞われた。それは静まらない平家の亡霊によって起こされたものであった。群衆のなかから怨霊は波とともに現われ、その青ざめた姿が、船を威嚇しながら迫ってきた。怨霊のたたりは、ぞっとするほど恐ろしいものであった。

弁慶 Benkei は、船の先端に行き、その亡霊に呪いを唱えた。すると、亡霊は海に沈み、海は次第に静かになった。

二人の芸術家が、この主題をとりあげている。ひとは北為で二枚に及ぶ作品（図23）を制作し、もうひとは二代豊国である（図22）。

北為は、船の先端に弁慶が以前の僧侶の姿で武器を持ち、怨霊の嵐と波の激しさに立ち向かっているところを描いている。二代豊国による作品構成の上で重要なのは、むしろ不幸な先導者としての平知盛 Tairano Tomomori の亡霊の姿である。

後醍醐天皇 Kaiser Go Daigo は、日本の重要な支配者のひとりであり、強引に天皇の権力を尊大な執権 Schikken（帝国の存続者）で押し通そうとした。彼の執権の間、状況が一変する重苦しい争いが生じた。北条高時 Hojo Takatoki は、天皇とその家族を、一時六波羅 Rokuhara の彼の城に監禁し、皇太子量仁 Kazuhito を天皇とし、そして権力を欲しのままに統治したのであった。1333年初頭に、天皇は家族とともに逃亡することに成功する。かれらが吉野川にたどり着くと、同じように皇后にもあり得ないことが起こった。

皇后の女官のなかに若い娘がひとりいた。彼女は伊賀局 Iga no Tsubone と言ひ、信じられないほどの怪力と器用さを兼ね備えていた。追跡者の叫び声が次第にこちらに近づいてくると、伊賀局は一本の樹木を大地から引き抜いて、河幅の狭い場所に投げ置き、そこに瀧を造った。

それによって幸運にも皇后は、対岸に渡ることができたのであった。

伊賀局は、男のような勇気を持ち合わせていたため、亡霊や幽霊は彼女に恐怖心を与えることはできなかった。彼女は微動だにせず、入水した將軍清忠の霊に向かって立ちほだかった（図20）。

ある晩、天皇は京都御所に戻る際に、庭で聞き慣れないざわめきを耳にした。伊賀局は、畏れることなく明るい月夜のなかで歩を進めると、じきに巨大な天狗が目に入った。天狗は彼女のところに飛んできた。気を落ち着かせて笑みをたたえて伊賀局が挨拶すると、天狗は大きく輪をえがいて闇夜を飛翔して消え去った（図19）。

後醍醐天皇の最も忠実で重鎮な家来の新田義貞 Nitta Yoshisada の死後、その息子の新田義興 Nitta Yoshioki は、天皇のために戦い続けた。しかし家来が重傷を受け、巨大な敵の軍勢にも囲まれ、最終的に兵士らとともに武蔵 Musashi への撤退を余儀なくされた。足利基氏 Ashikaga Motauji は以前天皇の側に就いていたが、いまは曖昧な野望から敵側

に鞍替えした。この足利基氏 Ashikaga Motauji が、義興 Yoshioki にとって最も辛辣な敵であった。義興は、いまこそ後醍醐天皇を抹殺し得る時が来たと考えた。基氏の命令に従って、竹沢右京亮 Takezawa Ukyo no Suke という義興のかつての家来が基氏側に就いた。右京亮は随員のなかに、美しい娘をひとり連れていた。表向きは彼の娘ということだが、右京亮はその娘を義興に引き渡すことで、義興の離反に深い改悛の念を感じるようにさせ、そして再び鎌倉に移って攻撃をはじめるとを説き伏せようとした。彼、すなわち右京亮は、家来全員が自分に従うことを望んだのである。

義興は、武士に偽りはないと信じ込ませた数人の忠実な家来とともに出発した。矢口の浅瀬で一艘の船が待機していたが、それは右京亮の側近によって用意されたものであった。そこに義興は乗り込んだ。船には穴が開いていたため、船が義興を乗せたまま川の中央で沈み始めた。と同時に、待ち伏せしていた足利が、義興に向けて雨のごとく矢を打ち放ち、義興は波間に沈んでいったのであった。

すると激しい嵐が起り、恐ろしい稲妻が荒れ狂った。そして雲の上に、新田義興の怨霊が現われ、裏切り者を撃ち殺した。

芳房 Yoshifusa は、動きのある構成のなかで、その一瞬を表現した。義興の霊には炎が燃え盛り、敵への稲妻があらゆる方向へと降下する。幅の広い炎の光に出会い、打ち碎かれた右京亮は、瀕死の状態で地面に倒れている。二つの異なる集団の左右に、反逆者の群れが認められる。大変優れているのは、激しく互いにお互いぶつかりあう人々の動きである。その姿は、最も偉大なる生命力、反逆、憎しみ、畏れ、恐ろしい不安を持って表現されている（図24）。

芳虎 Yoshitora は、中心の二人を、さらに単純な方法で、同じ対象を限定して描いていた（図25）。道真の霊のように、義興もまた、敵を復讐する罪を成就するために、超自然的な力を分け持っていた。死者の霊は悪魔に変身したが、神々もまた、生きるもののために何か行動を強めることを目的として、悪魔の姿で表されている。インドの神聖なる存在で、仏教の神殿 Pantheon に祭られている四天王 Shitenno、すなわち四人の天の神と仁王 Nio とが、相当に荒々しい鬼の姿で芸術表現のなかに登場する。かれらは、信仰の守り神であり、敵対する悪の幽霊に対抗する聖なる仏陀の番人なのである。

二代豊国は僧侶門海 Monkai の逸話を描いている。門海が観音 Kwannon に寺院を献堂しようとしたが、病のために力が尽きて寺院を造営することはできなかった。夢のなかにこの守護神が現われて、門海の手をとり、門海に健康と新たな力を分け与えたのであった（図31）。

古い封建制度と境目の年に独自の描写が認められる。その頃になると、誰も英雄の登場を期待せず、また偉大な目的もはや誰も持つこともなくなり、文学と芸術の分野では、古い武士の国の姿に戻って日本を表現した。そしてあのような巨大な死者の霊を生み出したのであった。——あのような死者の霊に反映されたのか、あるいは欧州や米国の大砲が、日本民族に改革を強制し、古い大化の改新よりも、より大きな改革を強制する予感があったのか。国民的な版画家の作品や、日本の国家的芸術の最後の時代の作品をとおし

て、もう一度、伝統的で偉大な土佐の絵師へ、緩やかに回帰する。

それを示すような、「最も忠実なる人物」とされる佐倉惣五郎 Sakura Sogoro の話がある。芝居や美術の分野では、しばしば賞賛されている。この話の起源は、次のようなものである。すなわち、堀田正信 Hatto Masanobu は、父親である堀田政則 Hatto Masanori が亡くなったため、1651年にその所領を相続することとなった。若い正信は享楽好きで、奔放で恐ろしいほどに重い任務を家来に強いたため、貧困が領土全体で一般化した。懇願も全く顧みられず、危機が堪え難いものとなったため、300の集落の代表者らが嘆願書を起草し、江戸の將軍に直訴することを取り決めた。公津村 Kozu の名主であった佐倉惣五郎は、自分の命が危険にさらされることを知りつつも、またあらゆる危機を集結するための方法が、他になかったこともあって、嘆願書を手渡す役目を引き受けた。

ある日、將軍の家綱 Shogun Yetsuna が上野の寺に赴いたとき、惣五郎は、嘆願の時期だと判断して、大名行列が通りすぎる際に、將軍の籠に嘆願書を持って直訴したのであった。

その結果、堀田正信が將軍の前に呼び出されたが、そこで上手く解決できると理解した。將軍は大層憤慨し、嘆願書を携えてきたそれぞれの長を、死でもっておどしたのであった。その怒りのなかにあつて、惣五郎が英雄としての勇氣をもってあらゆる罪を背負い込んだ。惣五郎は家族とともに投獄され、惣五郎とその妻が、恐ろしい磔の刑に処せられた。死の苦しみの下に十字架に貼付けられた二人の目の前で、二人の息子と一人のまだ幼い娘が斬首刑とされた。これは1655年のことであった。

5年後、悪魔のような正信に対する刑が急ぎ追い打ちをかけた。彼は全所領を失ったことを將軍によって伝えられ、徳島へ終身流されたのである。一方公津村には、惣五郎を記念する社として、惣五神社 Sogo-jinja が造られた。そこには惣五郎の追憶が永遠にまつられている。

最も強い筆遣いで、国芳 Kuniyoshi は、大名が惣五郎の亡霊に追いかけられる場面（確か舞台画から）描いている。3人の亡霊は常に同一の霊であり、逃げ回る者にとって、逃げようとする方向に現われるので逃げるができない、という場面が表現されている。かれの苦しめられた顔の前に現われた周囲の顔は、ぞっとする化け物のなかで変貌し、蛇が彼の前で舌を出して行く手を阻止し、腕を食いちぎるのである。一度も彼の剣は、苦しみから救い出すことはなかった（図106）。大名の堀越大領 Origoshi Deiryō と浅倉当吾 Asakura Togo の亡霊が描かれている。

同じような主題を、国芳は節度のある方法で繰り返している。ここでは、殺された二人の亡霊が、二人の大名の向こう側に立っているものである。構成は、落ち着きをもって、また繊細に練られている（図109）。二代豊国は、同様の考えを、乏しい形を使いながらもコミカルな幽霊の姿で繰り返している（図107）。

歴史的な人物によって繰り返された亡霊の一群には、化け物の歴史が関連しており、その歴史は、長い間忘却されていたために、地方の伝説のなかに源泉が探せるのである。そして国芳、国貞、広重には連作があり、東海道 Tokaido という京都から東京への長い街

道にある宿場の連作には、短い言い伝えや妖怪の歴史が含まれている。そうしたシリーズには、依藤太の伝説や、竜王の娘の話、あるいは法然上人による竜王の娘の治癒、そして岡部の猫婆などが含まれている。

大衆の質素さから生じる豊かな感性は、日坂 Hisaka の幽霊の話に見られる。これを二代豊国が美しい紙に描いている。日坂という小さなところに、ある若い夫婦が住んでいた。二人は子供を望んでいたが、夫は長い旅に出なければならなかった。

ある夜、盗人がその家に押し入り、一人でいた妻を、言うとおりにしなければ殺す、と言って脅した。しかし彼女は、遠くにいる夫への忠誠を壊したくなかった。そして盗人に全力で抵抗したことで殺されてしまった。慈悲深い神である観音に、彼女はいつも心から祈っていたので、観音は、殺された彼女の上に現われて、彼女の生まれなかった息子に命を与えて育てた。夫はその間、できるだけ早くに旅を終えるようにした。不安な夢が彼を苦しめた。毎夜赤ん坊の泣き声が彼の耳元にかすかに聞こえた。夫が夜中によく家に戻ってきたとき、道には妻が立っているのに気づいたので、夫は妻を抱こうとした。しかし、彼の腕には何もなく、夫が見たのは、妻の幽霊であった。その幽霊は、夫に子供を手渡した。かすかな声で妻は、自分が殺されたこと、そして殺した者の名前を訴えた。長らく亡霊は夫と子供の前に現われて、二人が危険な状態に陥ったときに、必ず二人を守ったのであった（図86）。



図23 北為《壇ノ浦の戦いの亡霊》ベルツ・コレクション



図22 二代豊国《壇ノ浦の戦いで溺死した平家の亡霊》アウベルレン・コレクション



図20 兼信《伊賀局》アウベルレン・コレクション



図19 芳年《伊賀局(「吉野山夜半月、伊賀局」『月百姿』)》



図24 芳房《竹沢右京亮に抹殺される新田義興(清盛布引滝遊覧義平靈難破討図)》ナウマン・コレクション



図25 芳虎《矢口渡しで竹沢右京亮が新田義興の霊に殺される(「川崎」『東海道五十三次』)》



図31 二代豊国《門海の前にあらわれた仁王(「住持門海」『観音靈験記』)》



図106 国芳《歌舞伎場面 浅倉当吾(「東山桜莊子」)》



図109 国芳《佐倉惣五郎とその家族の亡霊（小桜当吾）》アウベルレン・コレクション



図107 二代豊国《佐倉惣五郎の霊が、武士浅倉当吾（役者）に現われる》ランク・ハルボウ・コレクション



図86 二代豊国《日坂の霊（「日坂」『東海道五十三対』）》ネッター教授コレクション